ひょうたん島通信

大槌発! 第22回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱(ほうらい)島という小さな島があります。
井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。
ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

「新青丸」が母港・大槌に初着岸

木暮 一啓　大気海洋研究所地球表層圏変動研究センター教授、同東北マリンサイエンス拠点形成事業代表

2011年3月に起こった地震と津波が海洋生態系に与えた影響とそこからの回復過程を長期に渡って調べるため、大気海洋研究所は2012年1月に東北大学、(独)海洋研究開発機構と連携して、東北マリンサイエンス拠点形成事業を立ち上げ、大槌町にある附属国際沿岸海洋研究センターを拠点にしながら大槌湾を中心に観測、研究を行ってきました。

2013年6月にはこの事業の一環として、大槌を母港に東北海洋生態系調査研究船、新青丸が建造されました。港が震災によって破壊されていたためにこれまで入港できませんでしたが、岩手県と大槌町のご努力により、9月13、14日に初めて大槌港に着岸することができました。これを記念して13日には講演会、そして14日には式典と船からの餅撒きに続き、船内が公開されました。幸い天気にも恵まれ、700名を超える見学者が、順次最上部の船橋（操舵室）、研究室、食堂、さらに観測が行われる後部甲板や大型の観測機器類などを見て回りました。多くの見学者にとってその第一印象は、大きい船、ということだったようです。

新青丸は長さ66m、幅13mで総トン数は1,629トン。目的とする観測点に正確に到着し、多少海が荒れていてもその位置を保持するため、360度方向を変えられるプロペラ（アジマススラスター）が装着されています。三つの研究室に加え、魚群探知機、海底地形測定装置、海洋気象観測装置、各種観測機器類、船内無線LAN、ウィンチ類など最新の装置類を備えています。定員は41名でそのうち15名の研究者が乗船可能です。通常の航海では乗船研究者の半数程度は大学院学生です。

青空の下、のべ700名を超える来場者の方々が船内を見学。

ところで、新青丸の一つの航海はおおよそ一週間程度ですが、観測は昼夜の別なく24時間体制で行われます。観測に加えて得られたサンプルの処理が重なると、航海期間中、まとまった睡眠時間を取れないことがしょっちゅうです。その意味で、新青丸は最新の機器を装備した快適な船ながらも、我々にとっては厳しい研究の場、ということになります。

なお、新青丸は（独）海洋研究開発機構に所属していますが、1982年以来日本の沿岸域の研究を担ってきた学術研究船、淡青丸の後継船でもあるため、大気海洋研究所がその研究内容や運航計画の策定に責任を持っています。研究航海に興味ある方は是非同所の共同利用共同研究推進センターまでご連絡ください。

ぴーちゃん日記

国際沿岸海洋研究センター事務職員の「ぴーちゃん」です。6年前、岩手大学から出向で沿岸センターに着任し、大槌町で3年程過ごすも、震災によりふたたび岩大に異動。2年の時を経て2013年4月から戻ってきました。

大槌町との土地交換に関する協定締結

大槌町と東京大学は、昨年度「東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター研究施設等再建に関する覚書」を取り交わし、両者共に復興、再建に向けて取り組んでおりましたが、今年度には「土地交換に関する協定」を締結しました。両者間で沿岸センター再建に必要な土地交換契約締結のための協定を結ぶ事により、文科省への予算要求等、研究施設等再建に向けた具体的な動きが始まっております。

赤浜地区の復旧工事も徐々に重機が活躍しだし、被災建物の基礎撤去作業が進んでおりますが、計画どおりに進んでいない基礎撤去・樹木伐採作業や、膨大な量の盛土計画を日々見ていると、平成30年度中に予定通り移転できるのかが心配で心配で心配で、いまだ不安な毎日を過ごしています……。

沿岸センター再建予定地の赤浜地区では、こんなに高く（6m以上）盛土する計画になっている。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）